死神よ　死神よ！

島さち子

死神よ　死神よ！

装画

島　さち子

死神よ　死神よ！

遺言ひとつなかった。この一週間、竜介はずっとこの機会を待ちつづけていたのだ。凪子一人残して、優しい言葉一つかけずに……。

「何故なの？　わたしの名をもう一度呼んで！　愛しているといって！　愛しているから死んだのだ、愛しているから先に行って待っている、そう言って欲しい」凪子は叫びつづける。

彼は無言。彼はもういない。頬に触れ、その冷たさに震え上がると、凪子の膝から竜介が滑り落ちた。逝ってしまったのだ。わたしも行かなければ……。死ぬときは一緒よ、そう誓ったのは、すぐこの間のことだったのに、急がなければ……。凪子は病室の窓によじ登る。新婚二週間、思い残すことはない。下は石畳。呼吸を測ってから、前に両腕を大きく伸ばした。ステップを踏む。凪子の上体は落ち

ていくのに、下半身がついてこない。時間が止まった。力のバランスが変わって、凪子の身体は腰からゆっくりと部屋のなかに吸い込まれる。

ベッドが揺さぶられていた。ベッドの脇に凪子は座り込んで、土台からベッドを揺さぶり続ける。ベッドと一緒に凪子も揺すれ、部屋中がもっと激しく揺れ始める。世の中全体が震え上がっているのだ。行かせて！　早く行かなければ彼に遅れてしまう。花瓶の水を替えにさえ行かなければ、わたしひとり死に遅れることはなかったのだ。何故止めるの、何故邪魔をするの！　凪子の泣き声が波になって押し上げられると、その間だけ、ベッドの揺れが小さくなる。直ぐこの間、結婚して、気づくと彼の二本の足がなくなっていて、いまは未亡人、まだ二十三歳だなんて、わたしは嫌！　サイドテーブルの上の二人の結婚写真が振動で死の方へ移動していくのが見える。わたしが足になってあげなければ、竜介は歩くことができないのだ、どんなに不自由していることか。今朝まで二人の前には長い人生がある筈だった。凪子が蒼白の額にかかる髪を払い除けると、竜介の死体は何時運び去られたのか、夢のように掻き消えていた。

看護師が凪子の二の腕をつかむ。

「さあ注射をして、眠って起きたら、気分がよくなるわ、爽快とはいかなくても落ち着きが戻って来

る」

「ヤジロベーの奥さん！」誰かが近くでそう言ったような気がした。凪子はショックの正体を振り返える。誰だったのか。それを払い除けるように、眠りの底へ。凪子は自分から真逆さまに陥ち込んでいった。

あのとき、手術中の明かりが消えた。終ったのだ、凪子と竜介の母親の弘子は思わず立ち上がった。誰も出てこない。失敗した、死んだ、だから出て来ない。医師もなんと言っていいか分からないのだ。あんなに嫌がっていたのに無理に手術を承託させて……。その結末は片足になるのだ。根治を願ったにしても、手術の危険をどうして考えてみなかったのだろう。麻酔による死亡、失血、手術ミス、輸血ミス。救急車で運ばれ、面識もない医師にどうして竜介の命を丸ごと預ける無謀を犯したのか……。もうとりかえしがつかないのかもしれない。そのとき、〔手術中〕のあかりが再びともった。電気系統の故障だったのだろうか。手術にどんな影響があったのか。凪子と弘子は顔を見合わせて再び椅子にもどった。二時間も手術が遅れたうえに、手術時間が余りにも長すぎるような気がする。患部から、充分の高さ、十糎以上うえを切断しなければ命が危ないと中山医長はいった。幸い早期発見したから肺に病巣はいまのところ認められない。いまなら根治の確率は高い。医学は進歩しているのだ。いず

れにしても手術中のサインは赤々と点いていた。
悪夢だった。
新婚旅行のハワイで気づいた。もともと竜介にとっては膝関節の故障は、ラグビーの選手だった経歴からも、日常のようなものだった。左足には外傷性の関節炎があったが、右足にも疼痛があるようになってから三日は過ぎていた。足を二本並べてみると、両足とも膝関節で腫脹していて、右足には静脈が浮き出していた。この病気は十代に多いのだというのに二十五歳にもなっている彼が骨肉腫に……。思わぬ転移があったのだろうか。激しい頭痛がきた。生きていて欲しい、生きていて下さい。
手術室から出たときには、思いがけなく、彼は二本の足を失っていた。担当医だという若い医師が凪子の耳元でぼそぼそと言った。
「病状が思ったより進行していましたので、やむなく両足切断しました」
「そんなことが……？」
凪子は絶句した。
自分の両足ともなくなっているのに気がついた日の、怒りと嘆き。竜介はうつぶしベッドを叩いて号泣した。
「どうして持ち主に無断で勝手に切ってしまったんだ！　なんのことはない、皆ぐるになって騙して

いたのか！」

あれ以来、彼は医師と、妻と、母に対する信頼と一緒に言葉を失ってしまった。凪子は医師の言葉を信じかねたが、すでに現実がそうであってみれば、治療もあって転院することも出来ず、あとはどうやって彼の気持ちを引き立てたらよいのか、それに腐心していた。

花瓶を抱えて、病室に入ってきた凪子の足が竦みあがった。竜介がいない、いや、いるにはいる。いるが何かが違っていた。抱えている薔薇の花と花の間で室内が傾くと、彼はベッドからずり落ちていた。慌てふためき、花瓶を床に投げ出し、駆け寄って竜介に縋りつき、引っ張りあげようとした、格闘する、何度でも。力つきたとき、彼の身体はヨーヨーのように力なく揺すれた。よくみると、ベッドの背の鉄柵に括られた細い紐が、彼の首に食い込んでいた。死んでいるのだ。これこそ凪子の恐怖の総てだったのに……。手術から一週間、これだけを怖れて、いっときも傍らを離れることが出来なかったのだ。眠っているのに安心して、花瓶の水を替えに行ったのが油断だった。彼にはこんな高さがあればよかったのか？　紐を切ると前のめりに落ち、首が床をなめた。体を上向きにした。目は固く閉じられていた。急いで胸を押すと、最後の空気が行き場を失ってごぼごぼと音をたてた。

夢のなかで、先方を二本の足が走っていた。竜介が必死でいざりながら追い駆ける。凪子はその後を走っていた。早い、早い、もうすぐ追いつけなくなる。待って、待って、待って欲しい。わたしを

置いていかないで！　わたしを独りにしないで！

目覚めても、手足の動きが不調和で、ぶつかったり、躓いたりする。それでも荷物を手当たり次第、スーツケースに放り込む。何時間眠ったのか霊安室にいったときには既に竜介は弘子に引き取られたあとだった。凪子が病棟の中央センターに戻ると、今まで立話をしていた看護師たちが、ぎょっとした顔を立てて向き直った。

「先生方に、何かあったのですか？　中山医長も、担当の若い先生も、手術以来一度もお見えになりませんけど……」

「何かって？　何もありません。あなたのお休みの間に、お母様が先生方と話し合われて、総て了承してかえられましたよ」

年配の看護師が用心ぶかそうに答える。病室に引き返えそうとする凪子を若い看護師が追い駆けてくる。

「ご一緒に帰りましょう、わたしも帰る時間なんです」

精算をすませ、外に出ると、派手な私服に着替えた勢田看護師が、凪子と並んで歩きはじめる。

「わたしの知っているのは、病院側に重大なミスがあったということ。その責任者は手術のあと、すぐ辞めさせられました。名前は忘れましたけど、江口先生。聞いたことあるでしょう。渋谷の江口病

院の跡取り息子ですって。とにかく緘口令が敷かれているんですよ。手術の関係者から、あの日立ち会った病棟の看護師まで、異様としかいいようがないんです。でも、あなたがどんなに頑張っても、細かいことは聞き出せないんじゃないかしら。ですから、騒がないって約束して下さいね。でないと、わたしまで首になってしまいますもの」

「ああ、約束します。で、重大ミスとは？　なんなのか、そこを教えて下さる？　」

凪子の必死の眼が、看護師の眼のなかに潜り込む。

「つまり、右と左を間違えて……」看護師は言いかけてから口をつぐんだ。

そうだったのか。途端、病院に駆け戻ろうとする凪子を勢田看護師はしっかりと抱き止めた。

「フォルマリン漬けになっているんでしょう。返して貰いに戻るの。放して！」

揉みあっている二人を、塾帰りらしい少年達が不思議そうに取り囲む。

「喧嘩してるんじゃないから、さあ、早く帰りなさい！　」勢田看護師が笑い声をあげると、異常を嗅ぎ分けた少年達は、何度も何度も振り返りながら過ぎて行った。

「あれは、もう、ありませんよ。足は切断後、切断部の骨と、腫瘍部分を採って、癌研の病理に送ったんです。後はすぐに焼却されました。危ないものを何時までも残しておくものですか！　本来なら、この病院の検査室ですべきことなんですけど、骨肉腫について経験した検査医がいなかったので、確

認してもらうことになったんです」
「そんなこと、訴えるわ。いくらなんでも、黙っているわけにはいかない」凪子は首を振った。
「それは止めたほうがいい。何の得もない。弁護料と、あたら青春の無駄ずかいよ。増して自殺したんですもの。医師を殺人罪にすることができる訳がないのよ」
「江口先生は、いまどこにいらっしゃるの？　」
「さあ、またも首になって行くところがないのでしょうから、ご自分のお家の病院にでも入るより手はないでしょう。あの先生は、大學十二年、国家試験三年かかっていらっしゃるんですってよ。病院としては火の粉を払ったというところかしら。でも、責任は執刀医にある、何もかも人になすりつけて，逃げ延びられるものかしら？　これが、わたしの知リ得たすべてよ。決して騒がないって……、わたしが他の病院に移るまでは……」
　凪子の頭のなかに深淵がぽっくり口を開けた。看護師の言葉は何を示瞬しているのだろう。それは……復讐……？

男はやや前かがみにすり足で歩く。歩くと大き過ぎる靴の先に詰め込んだ新聞紙がかさかさと音をたてる。この靴を五百円で見つけた時の嬉しかったことといったらなかった。いま、靴は新品のように男の足許で陽光を反射させる。大き過ぎて買い手がつかなかったのだろう。下手に歩くと一足ごとに靴から踵が抜け出して、上下運動と前進運動を同時にしなければならなくなる。

男はM大學病院の近くにある仲間の溜まり場「リンチ」への階段を降りていった。

「江口君、どうだった？　」先輩が声をかけてくる。

「いやあ、また駄目！　失敗です。県に就職したまではうまくいったんですけど、一週間と持ちませんでした。ひどいもんですね。じゃりの検診なんていったら、来るわ来るわ、まるで、戦争ですもん。聴診器を当てても、泣き声が邪魔になってなにも聞こえやしない。やたら耳の孔に聴診器を突っ込むから、耳のなかが痛くなって……それで無意識に首に掛けたまま聴診器をあてていたという具合で……」

「はあ！　やったか、それなら俺も前にやりそうになったことあるよ」

「いずれにしても何も聞こえてやしないんだもの、僕としては同じことなんですけどね。衛生課長と部長とかいうのが真赤になって飛んできたんです」

「おまえも、やってくれるよなあ！　」
「それからが涙ですよ。彼らは調査と称して大學の事務から病院の医局まで、僕が以前勤務したところにも次々電話しつづけ、その上に何と言ったと思います。畜生！　この肩を叩いて、（何人殺した？　）なんていいやがったんです。（はい、数え切れないくらい）僕は言ったんです。勿論、ジョークです。それなのに、今度は、やつらの方が真っ青になってしまって、もう、いくら脅しただけだと取消しても駄目なんです。それで首です」
「阿呆はそいつらなのに、自覚症状がないんだから、かなわんなあ！　」
「僕はこの間、東西病院を辞めさせられたばかりですよ、ついていません。何をやらかしたかって？　長野さんも楽しそうに聞きますね。右と左を間違えたんです。足ですよ、勿論、僕は時間がないから、先に消毒をしておいてくれといわれて消毒しただけで、執刀なんて出来るわけないんですけど。何もかも僕が悪いことで落着しました。もともと他人の右左ってのは、むつかしいんですよね。認識するには半回転の捻りが必要になる。ウルトラCですよ。向かって右左という表現方法もある。どうしてそんなことになったのかと言われても、僕にも全くわからないんです。そうなったとしか……。ただ、ただ、怖くて恐れ入っているだけでしたから……」
「そう言えば、俺は今でも右左ってのが一寸苦手だな。ほら、子供の頃、視力表の前で左右を間違え

るんじゃないかとびくびくしていた不安、そんなものがまだ残っている気がするんだ。しかし左右を間違えたのは不注意には違いないとしても、やはり責任を負うべきは執刀医だろう！　」先輩は言ってウイスキーを一気にのみ干した。

「僕は、未だに注射器を持つと手が震えるんですよ。どうもこれは隔世遺伝らしい。祖父は死ぬまで注射を打つとき手を震わせていたそうですから。内科の僕を整形外科に回すなんて、もともと酷なんですよ」

「俺も、本当のことをいうと、血を見るのが、いまだに怖い。でも、怖い方が正常なんだろう、えっ、最も人間としてだが……。で、これからどうする？　」

「医大の医局から締め出されていますから、いい口もかかっては来ない。こうなったら、僻地にでも行くしか手がないようです。……ところで、今日は、お嬢さん来ていないんですか？　」男は眼で柏木早苗を探す。

「残念でした。彼女、何でも、若い男の患者が来ると、脈をとったまま手を放さないんだって、もっぱらの評判ですよ！　」後輩がいった。

「正確をきそうと、一分も握っていると、そういうことになるんだ。総合失調症だと思われているから、面白可笑しくいうのがいるんだよ」先輩が弁護する。

「彼女、江口に気があるらしいけど、結婚しようって勇気はないのかな？　」
「どんな種類の勇気も僕にはありませんよ。なにしろ家が病院だからという理由で、自分に合う筈もない職業を選んでしまった。それも勇気がなかったからです。失敗して当然なのかもしれません」
「勇気がないから、お互いにこの程度ですんでいるのさ、この上勇気を持ったら、それこそ、何人殺すかわからなくなるさ」
「僕は直接殺したことはありませんよ。しかし、間接的にだったら人を殺している。それが、こたえているんです。何とか罪滅ぼしを……」
「あれえ！　患者の奥さんに横恋慕したから殺したなんて疑われるなよ」
男の手からウイスキーのグラスが滑り落ちた。酔いがまわっているらしい。手がテーブルの上を追いかける。勢い余って弾き飛ばされたグラスが派手な音をたてて床に散乱する。
「ところで、先輩、さっきのことですけど、フイルムをシャーカステンに裏返しに入れたんじゃないでしょうか？　それで、左右をまちがえたのでは？　僕それで、失敗したところですよ」
後輩の三平は何をいっているのだろう。みんなの顔が七面鳥のように変化し、色が薄れ焦点が定まらなくなる。新婚旅行から帰ってきたばかりだという骨肉腫の若い患者の眼が忘れられない。墓穴を映していたあの眼はもう何の望みも持っていなかった。

誰かが男の足先を踏んでいった。男は椅子の背から白いカバーを剥ぐと、丁寧に靴を拭った。なにもかも動いていた。店内の照明まで回転している。

「江口先生、いらっしゃいましたら、至急、ご自宅に御帰りください。お父さまがご危篤だそうです」

何回も、何回も、店内放送の女の声が繰返している。男はカバーのほこりを払ってから、椅子の背に掛け直し、ゆっくりと立ち上がった。

曽我　凪子様

友愛会自立資金受給者募集

この基金は大正から昭和の始めに掛けて、女性解放運動に取り組まれた、平林希世女史に共鳴した富士譲氏の遺産によって設立され、不幸に見舞われた若い有能な女性を激励し、自立させるために運用されています。

受給内容　　月額　　二十万円

貸　　与　　東京都内にある１ＬＤＫ（五十平方メートル）のマンション一室

期　間　三年間とする。尚、事情によっては延長されることもある。

制　限　受給者の身につける職種、学ぶための学校、事業所等に関する制限は一切ないものとする。

義　務　給付期間中は申すに及ばず、自立後も、如何なる義務も課せられることはない。

以上

東京都中央郵便局私書箱１８２３号

友愛会基金委員会　事務局

凪子は迷っていた。もう何度読み直したかしれない。こちらに都合よく出来すぎている。そのことが応募を躊躇させる。もう殆ど暗記できるくらいだ、これが受けられるとしたらどんなに助かるかしれない。竜介の死後、凪子は竜介の実家の横浜で過した。葬式から埋葬、四十九日まですませて帰るつもりが八ヵ月にも延びたのは、弘子と凪子の双方に、互いに自殺の番人をしているつもりがあったからだ。夜中に何度も跳び起きては、弘子の寝室に走り、その頬に触れて体温をこの手に感じた時の

あの安堵感。夜中に眼を覚ますと弘子がベッドの傍に立っていることがあった。お互いに同じ怖れを持って身動き出来なくなっていたのだ。漸く、東京に出て来たばかり、学生時代の安アパートに落着いたものの生活のめどが未だ立っていない。預金ももうすぐ底をついてしまう。そんなときに、まるで、こちらの窮状を知りつくしたように、友愛会自立資金受給者募集の手紙が、横浜から回送の付箋がついて舞い込んだのだ。

この世で一番不幸に見舞われた女に与えられるのだとしたら、凪子に与えられて何の不思議もない気もする。それは心の痛手の大きさの問題なのだ。しかし、不幸を他人が測ることなど、できっこないし、凪子がその痛みを誰にも訴えたことがないのだから……。

凪子は絶望にひしがれたように印刷物を封筒に戻した。あんなに元気で陽性だった竜介が、手ばなしで泣き続けているから、一時も竜介のことを忘れたことはない。左右を間違えた、そんなふざけた失敗で愛する夫を殺されてたまるものか。竜介の死ぬ前、病院側の説明を求めて息巻いていた弘子が、死後は急に気落ちしたのか、真相を知りながら追及の手を引っ込めた。それが不思議でもあったが、所詮、それが母親の限界なのかもしれない。凪子としても敵に金をせびる気はなかった。復讐は静かに無言で行うべきもの。しかし、復讐のためには、金も場所も必要になる。この際、利用できるものは、利用しなければならないのだ。今更良心に迎合する気はない。申込書に記入すると、もう二度と

迷わなかった。

　凪子は上をみて歩く。あれから一年が過ぎ、再び秋が訪れていた。駅で降りると、地図を頼りに東南大通りから入って五分、友愛基金から貸与されるシティマンションは、上の方が細くなっている、いわゆる鉛筆型、十階建、煉瓦色の建物で、部屋は１００１号室だった。エレベーターで上がり、郵送されてきたキイをドアに差込む。ライトベージュの絨毯に黒のベッド、黒い机に応接セット。テレビ、パソコン。食卓セット、白いレースのカーテン。南側の窓を開けると、空き地を隔てた隣りにこのマンションに対して、直角に立っている白いビルが見えた。そのビルの九階がここの十階と丁度同じ高さであるらしいが、こちらの窓は南面、向こうは北面、最上階にだけ、換気口のような小さい窓がある。下で見た時は　道路に沿って建った雑居ビルで各階からさまざまな広告が突き出していた。全部が新品で揃えられている部屋、再び新婚の花嫁になったような不気味さがくる。凪子は持って来た旅行鞄を横に置いて暫らくじっと坐っていた。

　自分以外の誰かの臭気が感じられたら、すぐに引き返そうと思い、部屋の中の品々を一つ一つ手に

とって見る。茶碗やコップにはレッテルがついている。ベッドカバーの下には、毛布やシーツが完全に整えられていたが、新品で皺一つなかった。ただベランダに出してあるゴミ箱の中に、タバコの吸殻が入っているのが気になる。口紅はついていない。急いで全部の錠を点検する。うっすらと電話の上にほこりがたまっていたが指紋らしいものは見えない。家具を運んできた職人か、友愛会の会員が捨てていったものに違いない。初めて鳥篭に入った小鳥みたいに神経質になりすぎている。

凪子は警戒しながら、一方でこの部屋に満足している自分に気づく、想像以上に至れり尽くせりだからと言って、気を悪くされては友愛会としてはたまったものではない。難をいえばカーテンがレースのカーテンだけで、カーテンレールが一本であることだけだが、最上階だから、覗かれる心配は皆無だ。これならあとはピアノを運んでくるだけでいい。

凪子は久し振りに元気を取戻し、新しい行動計画を描き、そのために揃えなければならない小道具のことを考えつづける。一番の難関はこちらの正体を知られずに、敵をおびき出す方法。

窓のカーテンを開けて外をみる。遥か遠く竜介と二人で歩き廻った学生街が紫色に煙っている。右側には陸上競技場があって、あの頃の喧騒と、熱気が甦ってくる。力強いスクラム、抜けた！　彼が走る、右に左に敵を交わして走る。走る、走る、その速いこと！　大きく回り込んでトライ！　どっと上がる、勝鬨！　悲鳴。あの頃は二人で、今は一人分の人型しか持ち合わせていない。

でも、いよいよ行動開始。胸のポケットに竜介からもらった、最後のラブレターを縫い付ける。彼には、もう泣かずにしっかりと見ていて欲しい。

東西病院にあの勢田看護師の勤務していないことを確めて来たのだから、時はきている。

何時現れるか、男は緊張して待っていた。夜の向こうの光る四角。はっとすると、その部屋が輝き、四角のまんなかに立っている女の顔がこちらを向いている。新しい部屋に入った興奮で、まだベッドに入る気になれないのだろうか。

男は覗き見する小さな窓から光が洩れないように照明を消し、双眼鏡をかまえる。

女が窓に近づくと顔が暗く翳げる。窓枠から首を出して長い間、じっと都会の灯をみつめている。何を考えているのだろう。愛の記憶か、あの断末魔か、未来への恐れか。男に、そのなかに入っていけない苛立たしさがくる。

女が後退すると光が女の全貌を浮上させる。男はその美しさに息を呑み顔をゆがめる。女は男の目の前で着ているものを脱ぎ始める。彼は緊張し過ぎ、慌てて双眼鏡の焦点を狂わせてしまう。そのわ

ずかな隙に、女はパジャマに着替えていた。何もはっきりとは見えなかったが、男は開き始めの花のようなものを見たと信じる。いい香りが来る。くるから、来る。

女はフロアスタンドをつけ、電気を消した。カーテンを引かずにベッドに入ったのだろう。スタンドも消えた。彼はその後も二時間、女の部屋の闇を見つづけ、釘づけになっていた。

とうとうその日がきたのだ、小鳥は用意した篭のなかに飛び込んできた。余りにも無防備に……。男は身震いし、その場所を離れて居間に戻った。彼は椅子に力なくかけ、聞きとれないような小声でうめいた。

「僕のものだ！」

凪子は江口病院にむかった。個人病院といっても、東西病院の規模に近い白亜の総合病院。正面から入ると患者に混じって、白衣の医師や看護師が足早に往き過ぎる。

病院が違っていても、あの日の破局が昨日のことのように甦ってくる。悲しみと憤りが凪子の胸の中で渦巻く。四回通って漸く、あの男の姿をキャッチした。軽快な身のこなしで玄関から入ってきた

男は確かに見覚えのある顔。竜介の手術の日、手術衣のまま出て来て、両足を切断したと言った、あの顔に間違いない。少し腫れぼったい瞼、細い鼻柱、これといって際立ったもののない柔和な表情。多分あのような立場になければ、このような……。凪子は男の後ろから歩く。男に向かってお辞儀が繰返され、敬意が払われていた。そのことが我慢ならない。右と左も分からない男に。間抜け！　怒りを通り越して、凪子は声を殺して笑う。この男の力量と正体を知っているのは、わたしだけなの？

「ああ、病院長先生！　御蔭様で全快しました。今日退院です、一言お礼が申しあげたくって……」

退院するらしい患者が駆け寄ってくる。男は病院長になっているのだ。この若さで……跡取息子だとしても、早過ぎはしないか。この男に運命は甘すぎる、竜介に与えられた運命の過酷さに比べて、何という違いだろう。怒りが爆発しそうだった。ただの一回で巧妙に、強引に、この男を誘い出し、殺害するには、どうしたらよいのか。

凪子は怒りをおさめ、病院の近くの喫茶店に遁れる。勤務開けらしい看護師が二人入って来る。

「何を読んでるの？　」

「これは病院長の主宰している同人誌よ。(無の娘っ子)っていうのよ」

「へええ、変な名前！　」

コーヒーカップの触れ合う音。

「あなたも書いてるの？　まさか、と思うけど……」
「まさかとは、何よ、まさかとは……」
「彼が、病院長になった途端、みんな、なんだか態度がおかしいのよね？　そこまで権威に弱いとは！　」
「わたしは彼のことかっているわ。先代の病院長に比べたら、若いのに驕りもしない、差別もしない。たいしたものよ。それも、内面的な思考のせいじゃないかって、だから、彼の書くものに興味をもっているのよ」
「買い被りじゃないの！　なになに？　女たちの口元は、不意打ちの凶器、あなたと寝たいわ……だって。相当なものね。病院長のは、詩を利用して女あさりをしているんじゃないの？　奥様も大変ね」
「でも、そういうのって、評価はむつかしいよ。露骨だなんていったって、これ、可愛いいじゃん、そう思わない？　院長は自信満々よ。待合室にもこれが置いてある。誰か曲をつけてくれないかなあって、言っていらしたもの。あなた、作曲が出来るなら、チャンスよ。奥様は病気だし……」
「読む人が、はたしているのかしら？　時代遅れじゃないの？　」
「彼の作品には、赤い傍線が引かれていて、これは病院長のペンネームです、と注がはいっているのよ」

「それにしても、囚人とはねえ！　秀人に懸けているんでしょうけど、何だか悪いことしていそうね。誰かが笑いものにしているんだわ、きっと！」
「違うったら、いくら言っても分からないんだから！　権威には抵抗するものと、インプットされている、庶民の娘には、わかりっこないかな」
「なんですって！」
二人はもみ合い、険悪な空気になる。凪子は同人誌の「無の娘っ子」という題字を読み取ると、そっと、喫茶店から出て病院の待合室に急いだ。患者が雑誌を次々に手放して、黄色や青のカルテいりのクリア、フォルダーを受け取ると、診察室に消えていく。乱雑に積み重ねてある週刊誌の一番下に、詩誌は手垢もつかずに隠れていた。凪子はハンドバッグの上にハンカチを広げ、その上で、無の娘っ子を開き、読んでいるふりをしてから素早くハンカチに包み込む。これで、ともすれば彼に近づくきっかけを掴めるかもしれない。

「病院長先生に御願い致します」凪子は思いっきり魅惑的な声を出すつもりが、変声期の少年のよう

な掠れた声になる。
「どちらさまですか？　」敵意を感じさせる冷えた語調。秘書かもしれない。
「あの、ちょっと、ちょっと、あの……」
「お名前をおっしゃって下さい」
「……湊　囚人先生のファンなんです。怪しいものではありません」
　凪子は電話に向かい甲高い声をあげていた。無力な人間の本能的な叫喚のようで、思わず受話器を掻き抱く。
「暫らく、お待ちください」電話は院長室に回されたらしい。凪子は手でリズムをとりはじめる。
「はい、こちら、湊　囚人ですが……」その声は弾みがつき過ぎて、耳の中につんのめってくる。凪子は必死だ。
「わたし、音大の学生なんですけど、先生の詩に魅せられて、曲をつけて見ました。いま出来上がったところなんです。先生、お聴きくださいますか？　」
「ええっ！　今！　ここで？　」当惑した男の声が返ってくる。若さは無謀だ。
　凪子は自信を持って歌いはじめる。喉には自信がある。学芸会や音楽会の主役は、何時も凪子だった。竜介はそれに憧れたのだ。彼もそのころから音感が発達していたから……。シンコペーションが

多くてむずかしかったが、竜介の作曲を院長の詩にあわせた。勿体無いとは思ったが、目的の為には竜介にも協力してもらいたかった。

「ほう！　なかなかいい！　あははは……。あなた、素質がありますよ。まるで、一流の作曲家みたいですね」病院長の興奮が伝わってくる。

「あら、気に入っていただけて、嬉しいです。また、曲ができましたらお電話いたします。素敵な曲ができたら、またお聴きください」

「自分の詩に曲がつくというのは、詩に命が吹き込まれたという気がしますね」

まんざらでもない明るい声が返ってくる。凪子は唐突に電話をきった。

一ヵ月後

「素敵な曲ができました。こんなのは如何でしょうか……」

竜介の曲のなかでは珍しいセンチメンタルな曲に詩を乗せると、貧しい詩まで豊かな情感をただよわせる。何回も歌ってテープに入れ、上手に歌えた部分を集めて、うまく繋いだ、苦心の作だ。四分の四拍子、幻想的なメロディー。

「あなたが、嫌いだと言ったから、僕は追いかける、追いかける、追いかける。世界のまんなかまで。哀しくて、哀しくて。あなたが、愛していると言ったから、僕は逃げる、逃げる、逃げる。地の果て

まで。嬉しくて、嬉しくて。……」

電話の向こうには声がない。切ったのだろうか？　凪子は肝を冷した。竜介は新進作曲家としてデビュー寸前だったのだ。この曲のよさが伝わらない筈はない。　肢などなくても彼の才能は開花したのに……。

ふうっと息が受話器から耳に入り込んだ。絶対にこちらから誘いかけない、それが作戦。

「……逢えるだろうか」思いつめた男の声だ。

「……ええっ」凪子は思いがけなく受身に変化する。

「……僕の方にも、他に出来上がったばかりの詩もあるので、手渡したいし、きみの曲をもっと聴きたいね。きみの才能に間違いなければ、力を貸してあげようとも、思っているんだ。……明日の晩……」凪子はそれを期待しながら震え上がり、男の二言、三言が自分の耳を素通りしたのではないかと疑い、問い直していた。男はもの慣れた調子で待ち合わせの場所と時間と、目印を示した。病院長ともあろう立場をすっぱり忘れ果てているように凪子には感じられる。もともと注意力が散漫なのだ。でなかったら、このような不幸は存在しなかったのだから。

急いで用意してあるものを点検した。既に何回か頭の中でリハーサルしたことを熟練者のように実行する。

ワッペンのついたグレーのブレザーにチェックのスカート、ごく平凡な女学生スタイル。髪を目にかかるほど垂らして切り揃え、毛先はカールした部分をカットした。丸顔にみせ、少しでも若く見える工夫をする。前髪はすぐに上げることが出来るし、ドライヤーでセットすればもと通りにカールすることが出来る。いまの飛んでいる女子学生らしく、目に強く化粧して吊り上げ、ポシェットを斜めにかけた。まともに江口秀人から見られたのは手術のあと一度だけ、それも短時間なのだ。なりふりかまわない人妻の付き添い姿など記憶に残っている筈もない。

このところ、病院を探るのに、野暮な主婦姿や、ホステス風の姿をしたりしたが、この女学生スタイルは、凪子自身が驚くほど若返って見える。

待ち合わせのレストランは薄暗く、アベックばかりが幾組か入れ代わった。凪子は早くから入り口に一番近い席に陣取っていた。

江口秀人は定時に現れ、奥の席に急ぐ。凪子はほっと息を抜いてから後を追った。

「湊先生でいらっしゃいますか、曽我まりです」若々しく声をかける。

彼は振り返って、ちょっと身を引いてから手を差し延べてくる。力強い手だ。男の顔に驚きの表情が読み取れる。

「御酒は？　未成年ですか？　」彼は患者の瞳孔を覗くように顔をせりだした。凪子は顔を見られる

と慌ててしまい、横を向きポシェットの中を探る。
「あらない、ない！」テーブルの上にポシェットの中のものを並べ立てる。
「あれれ、ない、入れたつもりだったのに……、確かにいれたのに……、ああ、多分、ショルダーバッグから、ポシェットに急に変更してしまったものですから。そのほうが、素敵に見えるかな、なんてよからぬ考えが浮かんでしまったものですから。すみません、何曲もカセットテープに入れておいたのに……」凪子は思い切り混乱してしまう。囚人は笑い出した。
「お若いんですね、びっくりしたな、でも構いませんよ。残念には違いないが、生で歌って戴けるほうがいいですよ。それに、君に逢いたいと思って来たのだから！」
仕立てのいい縞のグレーのジャケットに、錆朱の花一輪あしらった黒いネクタイ。その上の顔が感じのよい微笑を浮かべている。
少しづつ度胸が戻って来る。もうすぐだ、譜面を一緒に持ち、肩を寄せ合えば、もはや、この男は死を呼び込んだようなもの。
目尻に向かって弧を描きながら羽毛のみたいに拡がる眉、折り目をつけたように細くて高い鼻柱、ふっくらとした女のような唇。
「先生はピアノをお引きになりますでしょう！　先生は、芸術家って感じでいらっしゃいますもの。

わたし、これでも声楽専攻なんですよ。ご一緒に歌えたら嬉しい！ 」煽てて油断させる。海千山千になった気分だ。

「祖父は、医者の癖に、注射をするのが怖くて死ぬまで、震えていたそうですから、デリケートな血も引き継いでいる筈なんですが、どうも詩なんて柄でもないようですね」

「そうなんですか？ あたりまえの感情が医師であるために忘れられていくのに、おじいさまは立派な方だったんですね。でも、医師というのは生死の傍にいすぎますもの、神経が太くなければ、やっていけないんでしょう！ 」

「そうだな、一人死ぬたびに自分も死ぬような想いをしていたら、とても心も、身体ももちませんね」

忘れているのだ、竜介のことなど綺麗に忘れ果てている。いまはその方が好都合だ。

この前の曲を二人でハミングする。大分飲んでいるのに乱れは見せない、音感はたしかだ。

「ああ、先生。もう、いただけませんわ！ 」

彼のつぶやく詩の断片は聞こえていたし、彼の手がふらつく自分の肩の後ろに回されているのがわかっていた。

そんなとき彼は肝腎の言葉を吐き出していた。

「酔ってしまいましたね、お送りしましょう！ 」

彼の手が凪子の尻にさっと触れてから手を取った。この手が竜介の足を……。重なった手の間に冷たい刃がある。耳のなかで竜介の泣き声が高くなった。

「もう、遅い、さあ、お嬢さん、立ってごらん！　」立てはしない。足を間違って切った男の前で立てるものか、倒れるしかない。倒れる。

男は凪子の顔を上に向かせ、右手を自分の肩の上に引き揚げ、左手を腰に回して引き寄せた。凪子の身体は半分持ち上がったまま、よろよろ歩く。首を回して見ると、男の顔にはやや困惑した色があった。危ない。車があるから、あまり呑んでいなかったのかもしれない。

「ああ、もう、大丈夫です。御免なさい、わたしったら、いけない人！　」

体を立て直そうと思っても、男に片腕をきつく回して抱き締められたまま、彼の車に乗せられていた。恐れだけが胸を充たしている。十分後か、二十分後か？

「そう、そこに入れて下さい」凪子は急に酔いが覚めたという風に、車をマンションと隣のビルの間に入れさせる。

「酔いは覚めました。もう大丈夫、ご一緒に唄いましょうね、先生！　ああ、嬉しい！　」

彼の腕の中で甘え、エレベーターで最上階に上がる。ガレージにも、玄関にも、エレベーターにも、人の姿は見えなかった。見られたとしても変装している。

男の顎の下に凪子は頭を埋め、必死に離すまいとしながら、戸口まで追い込み、彼にキイを渡し、ドアを開かせ、素早く室内に押し込んだ。さあ、息を抜いて！　あと一息。

ここに来るだけで相当な力を消費してしまった気がする。カーテンを大きく開き、窓を開け、風を入れてから、窓を閉じた。彼は慌ててレースのカーテンを閉じ、凪子を抱えあげると、唇を押しつけてくる。

「可愛いいね、こんなに人が可愛く思えるなんて、始めてのことだなあ」凪子は身を捩って頬で受ける。彼の手が乳房に素早く動く。体を寄せる彼を笑いながら押しやって、ピアノの椅子に逃げる。竜介がみているのよ。わたしは竜介の為に歌う。愛の歌を！

彼が勝手にウィスキーを煽っている。今まで堪えていたぶん、速度が速くなる。これで計算通りだ。せいてはことを仕損じる。男の方も別の意味でそう考えたらしい。凪子が二曲弾きながら、歌うと、ピアノを男に明渡した。

「凄いね、本格的な、歌曲がこんなところで聴けるとは、感激だなあ！　」

男は口ではいいながら、はりあうように、シャンソンを歌いはじめる。

「葉陰で狼がないた、食事で食った鶏の、綺麗な羽を吐きながら、僕もそのよにやつれよう……。ぼくのじゃない。ランボーだよ」竜介の曲にランボーがこんなにも乗って、うっとりする。男はピア

ノの上に置いたブランデーグラスをとって飲み干した。確実に酔いが回ってきている。
「サラダの葉っぱも果物も、摘まれる時を待ってるに、垣根のくもが食うものは、ただ紫のすみれ草」
彼は自分の歌に酔いしれ、ささやくような言葉を、凪子の感嘆の声で仕上げをする。
この幸福な気分、しゅしゅと花火がはじける。何を祝っているのだろう。頭がだんだんさがり、ろれつが回らなくなる。女を捕らえるように手がもがいている。
そのとき、凪子は、男の後頭部をめがけて野球のバットを振り下ろした。男は前のめりにつんのめって、ピアノは胸のつぶれるような轟音を発した。男が床に崩れ落ちる。
「彼を返せ！　彼をかえせ！　竜介を返せ！」
懸命に男の脳天めがけて打ちおろした。もう、腕が狂いまくって、凪子は何がなんだかわけがわからなくなる。ただ、何度も、何度も、振り下ろしていた。
振り降ろす度に、ピアノの轟音が新しくなる。

午後九時過ぎだというのに、女の窓に明かりがつかない。窓は何処よりも暗い。

十時、十一時、男は換気口程の小さな窓のそばに揺り椅子を置いて坐り、灯りを消したまま、力なく両手を垂らして、女の帰りを待っている。

彼女を雌犬なんかにするものか。大声で怒鳴りたくなる。何故帰って来ない、僕がこんなに待ちくたびれているのに！

眠気で何度ともなく膝の間に落ちていく頭を、根気よくせり上げ、みじめなふて笑いをして、女の部屋から目をそらそうとしたとき。その部屋がぱっと明るくきらめき、カーテンが開き、窓が開いた。暗さに慣れた眼には照明が殊更明るく光り輝き、一瞬見えた男女の姿が捕らえようもなく眩しい。窓はすぐに閉じたが、レースのカーテンを透かして、二人が立ったまま抱き合い、回転する影が映る。

見ている男の目から、さっと血が流れ出し全身が皺を寄せて、萎んでいくような気がする。影は押し倒されるように見えなくなった。

男の噛みしめた歯の間から怒りの声が洩れ、喘ぎがそれを追い越した。目をしばたく間、向こうの一人はピアノに向かい、一人が傍らに体を揺すって立っている。二人で歌を唄っているのだ。女の頭の影が低い。男の口が、瀕死の口のようにぱくぱく動く。その口は、見ている男の心を噛み始める。影が動く。女が立ち上がると、影の男がピアノに向かい、女は後ろに回った。何時まで歌っているのだろう？　その時、女が何か長いものを振り上げた。男は気持ちよさそうに歌っている。次の瞬間、

女は棒みたいなものを振り下ろした。何度も。何度も。
見ている男は体を乗り出していく。向こうの男の影は飛び跳ねてから消えた。野球のバッドみたいなものは、狂ったように打ち下ろされる。
見ている男はその度に声をあげた。そうだ！　やれ！　もっと！　もっとだ！
女の影が体を低くしてから、高くなった。そのまま棒立ちになっている。自分を失っているのか。やってから、考えるなよ！　どうした？　どうする？　どうすれば？
男は、向こうの男に対する自分の願望が妄想になって現れたのではないかと疑っている。女の部屋で何が起ったのか？　読み取ろうと、目を離せないでいる。
彼女が呼んでいる！　行かなければ……。

電話のベルが鳴った。放心状態だった凪子は縮み上がる。
「曽我さん、夜遅く、ピアノは弾かないで下さい。今、何時だと思っているんです？　安眠妨害じゃありませんか！　」隣の１００２号室の男が怒っている。

「すみません、気をつけます」凪子は掠れた声でいった。
「全く、非常識なんだから。なんだ、今の音は？　ヒステリーですか？　いいですか、八時過ぎたらピアノの練習は止めなさい。わかりましたね！　」言うだけ言うと電話を切った。覚悟のうえだったが、電話の来るまでの時間にしてどのくらいだったのか、いま、ピアノの苦情がくるのなら、それほど長い間ではない。凪子の頭の中を冷たい不安が渦巻いて、血がざわめきながら耳の穴に流れ込んだ。完全犯罪を夢見ていたのに、今晩一晩をどうしたら生き延びられるのか、それさえ心もとなかった。落ち着け、人殺しを死刑にしてあげただけのこと。もう、竜介は泣いてはいない。そのことが救いだ。深呼吸すると眩暈が止まった。
　ドアが静かに開く。髭を鼻の下に蓄え、黒縁の眼鏡をかけた男が入ってくる、凪子は返り血を浴びたままの姿で首だけ回して眼で追う。
　男は口をきかず、何時までも痛たましそうに凪子を見つめている。凪子はことの重大さに声も出ない。強盗でもなく、刑事でもなく、白衣なのだ。長い間、準備してきた計画があっけなく崩れていく。凪子は思わずその場に座り込んだ。
　秀人が仲間の医師に行く先を知らせておき、ここまで後をつけさせたのだろうか。もう一人ここで殺すことが可能かどうか。血のついた凶器が足許に転っている。凪子を見つめ続けていた白衣の男は、

ついに死体を助け越しにかかる。
「あっ！　」と声をあげ、頭を下において後退りした。その口が声にならない声を発してわなないている。
それでも震える手でテールライトをもち、男の瞳孔を覗き、頭の傷を調べる。聴診器を当てようとして取り落とした。じっと物思いにとらわれた格好で佇んでから、また男の上にかがみ込む。それは殺した友人の前で悲嘆に暮れているようにも見える。
凪子は素早く凶器を引き寄せる。構えようとするが、信じられないくらい力が入らない。
白衣の男は脇に開き、凶器を持つ凪子の方が死体に近くなった。男の髭に覆われた口元から、低いささやきが聴こえてくる。
「味方ですよ。何があったんです？　」その声が更に優しいささやきになる。
「あなたを助けたいんです。静かに、そっと、それを僕にお渡しなさい」
凪子は打ちのめすべきところを、後ろに凶器を隠して死体の方へ後退する。
「怖がらなくていい、ほら、よくお会いしたでしょう。この間は喫茶店でお見かけしました。僕はあなたを見守り続けて来たんですよ。隣のビルにある富士クリニックの、医師なんです」
「わたしは、復讐したのよ！　目的を成し遂げたんだわ」

男は喉仏をごくりと動かしたが、声は出ない。顔はバッドで一撃を受けたように引きつっている。
「あなたにわかりますか？　誰にもこの気持ち分かる筈がないのよ。わたしはこの男に竜介を、夫を殺されたんです！」
胸の中が激して大声になる。
「竜介は死んだ後も、毎日、毎日、泣き続けていました。でも、今は泣いていません。わたしはそれが嬉しい！」
腕時計を見た。午前零時を回っている。思いがけない闖入者にすっかり時間を食われていた。
「ことを始めないと……」白衣の男が小さな声でいった。
死者と殺人者を同時にからかうのも医師なのだ。分かっている。
「違う！　僕はあなたのファンです。外から見ていたら、影が見えて、あなたが、やられたのかと、慌ててやってきたんです」次第に男の言葉が、凪子には耳障りではなくなっている。
とにかく復讐は成し遂げたのだ。勝った、ざまあ見ろ！　あの男は受けるべき罰を受けた。だからと言って竜介が戻って来るわけではない。このあとのことはどうでもいいような気がした。この男が警察に知らせる気なら、そうするだろう。
返り血を洗い、着替えをし、ツナギの服に野球帽をつけた。凪子は無言で用意しておいたダンボー

ルを出して、素早く組み立てた。男は死体の腰を折る。その下に切り取っておいたダンボールの底面を潜らせてから、箱をすっぽり被せ、底を折り返し、綱でくくり、あとはマンション備え付けの台車に乗せた。男はいつ取り上げたのか死んだ男の車のキイを持っている。

「そこの血も何とかしなければ……」

血はピアノの上から、男の倒れこんだ二畳ほどのアクセントラグの上に飛び散っていた。

二人は酵素洗剤で拭った。こんなことをしていたら、もう、時間がなくなる。

「凪子さん、計画では、これからどうするんです？ 」

「あなたを、信じるには、確証が欲しいわ。口先だけでは駄目！ 」

「僕は、友愛会のものです……」

友愛会そこに突き当たっては謎と恩義が重なってしまう。友愛会が不幸な女の殺人者まで救う団体だったとは……？

縋れるものなら、縋りつきたい恐怖心が、男に傾斜していくのがわかる。なるようになる、凪子の度胸は決まった。一人よりは二人の方が心強いに決まっている。

「これをこの男の車まで運ぶんです。あなた、運ぶ？ そう、運びなさい！ わたしは大変な時だけ手を貸してあげます」

男が始めて顔をあげて凪子を見た。
台車に乗せるときと降ろすときだけが問題だった。死体の硬直はもうくるのだろうか？
いずれにしてもこの男を何処まで信じることができるか、それが勝負だ。
午前二時、マンションの中はしいんと静まり返っている。四階でエレベーターが止った。中年の男が一人乗り込んでくる。凪子ははっと体をすくめたが、浮気の帰りらしい男は顔を見られたくないのか、終始顔を背けていた。しかし真夜中の荷物の運搬は異常に見えたに違いない。
男をやり過ごしてから、江口秀人のＢＭＷの中に荷物を押しこんだ。あとは車で一時間離れた工場団地の駐車場まで突っ走る。二人とも沈黙していた。駐車場の隅につけると、上の箱を折り畳み、ボール箱の底を引き抜いて足を出し、シートベルトで支えた。
レンターカーに移ると、素早く着替えて工場の焼却炉にダンボールと手袋、と一緒に放り込んで火をつけた。焼却炉は詰め込まれていたゴミに火が移り、轟音をたてて燃え上がった。あとは死体から必死で逃げる。喉がひりひりして、唾も呑み込めない。この男が裏切ったら……。
「こうなったら、僕も共犯、密告などする筈がないよ。決して裏切らないから……」
凪子の心中が分かったように男がいった。
「でも、わからないわ。この足であなたが警察に向かわないとどうして信じられるの？　」

「理由はある、理由はあります」街灯の光が男の顔を照らし出す。髭と眼鏡に隠されているその顔に、意外に臆病そうな恥らいさえ見える。

「その理由は……あなたが好きだから。それに警察に真っ先に疑われる立場にいるのは、僕だからです」

彼は協力したことで怖気ついているのだろうか。でも、警察は男の力なしに殺せないと判断するだろう。

利用するのだ。アリバイは二人で保証し合うこと。凪子は胃痙攣で男に往診を依頼した。男が診察のためにいた時間は、午後十一時から十二時まで。約束したあと、男は腕を挙げ、富士クリニックに向かって、解き放たれた犬のように猛スピードでダッシュしていった。

何を持っていたのだろう？　野球のバッドだと理解するまで時間がかかった。何の為に？

男は熱い汗にまみれて目を覚ました。

江口病院長、江口秀人が死体で発見されたニュースは、朝八時半にはテレビで報道されていた。江

口家に早く駆けつけ過ぎる不自然さを怖れて、男は診察室に入り、曽我凪子のカルテを作り、往診の時間と病状、処置について記入し、病名欄に胃痙攣と書き込んで受付に回した。自分が震えもせず、何ごともなかったように落ち着いているばかりでなく、熱いもので充足しているのを、男は感じている。こんな日に限って診察は切れ目なく続き、ほっとしたときは正午を過ぎていた。診察室のドアを押して出て行く患者の蔭から、窺うような一対の鋭い眼がまず覗き、刑事らしい風体を引っ張り出した。

「はあ、それはテレビで……。僕も頃合を見て、弔問に行こうと想っていたところです」

「ほう、先生は診察されながら、頃合を計っていらっしゃったわけですか？　」

刑事は抜け目なく言葉尻を捕らえる。

「そんな質問をなさるということは、早くも何等かの仮説を立てていらっしゃるんですか？　」

「いや、そんなことはありません。失礼ですが、先生にちょっと昨夜の十時から、午前四時頃まで、どこにいらっしゃいましたか？　お聞きしたいと思いまして……」

「夕べですか？　夢のなかにいましたよ」

その時、診察室の隅で刑事に背を向けていた看護師が男を振り返った。

「お車で……」

「ああ、車じゃない、往診に出ました。胃痙攣の患者の往診に出ていました。時枝君、そうだったね」
「ええ、お帰りは、一時頃でした」
「ああ、そうです。思い出しました。十一時頃、電話があって、救急病院にと思ったんですが、すぐ隣のビルだというので、僕が引き受けました。時枝君は通いですが、診療報酬の請求の時期には、時に十二時頃になることがあります」男はいいながらポケットの中で凪子の部屋の合鍵を探った。
「秀人さんが病院長になられるのに、いざこざのようなものはなかったんですか」
「ええ、別に……。僕は何とも思っていませんでした。弟は優秀でしたし、注意深い人間……そう思っていたんだが……。彼は人に恨まれるようなことはしていませんよ。ほんとうです。ほんとに殺されたんですか？」
「本当ですよ。そうはおっしゃっても、やはり、病院長を継ぐとなれば、少しは……。ない。そうですか。では、往診した患者のお名前は？」
「ああ、１００１号室、曽我凪子です。今日午前中に薬を取りに来るよう言っておいたんですが、注射がきいて眠っているのかもしれません」
「とりあえず聴き込みを開始したところなんで、今日はこれで失礼します」
刑事は哀悼の意味か、ちょっと眼を床に向けた。

「ところで、先生のお車をちょっと拝見させていただけると有難いんですが……」
「時枝君！　刑事さんをガレージへご案内して下さい」
何時もは返事のよい時枝が何時になく戸惑いをみせる。刑事といういかつい男と付き合うのに気後れしているのか、返事もしない。
「いや、お忙しいなら、結構です。車のナンバーは？　」時枝は仕方ないというように、先に立って歩き出した。刑事たちが慌ててその後を追っていった。

「今、刑事がここに来ています。僕はこれから江口病院に顔を出してきます」
電話はそれだけで切れた。もう刑事が現れた？　何故、ここより先に、あの男の方に現れたのだろう。まさか、あの男が密告したのでは？
それに……何故江口病院に行かなければならないのか？　同業者だと駆けつけるものなのだろうか？
ドアのチャイムが鳴った。凪子は息を潜め、毛布を被ってじっとしている。同時に電話が鳴り響く、

電話に出るわけにも、ドアを開けるわけにもいかない。外の人物に電話の内容が聞こえるかもしれないのだ。凪子は耳を押えていた。

電話がなり終わったとき、ドアのチャイムも鳴り終わっていた。

今度はドアが叩かれている。仕方がない。チェーンをつけたまま、ドアをできるだけ細めに開けると、警察手帳が見えた。

「なにか？　」

「別に何もないんですが、夕べ、お隣の富士クリニックの先生の往診を受けられましたか……」

「ええ、それがなにか？　まだ気分が悪いんですけど。まだ吐き気がするんです。ご免なさい！　気分が悪くって……」

「往診は何時頃でした？」

「午後十一時から零時頃、そのころかしら……。すみません、立っていると眩暈が……」

「あ、お邪魔しました。それだけです。では、お大事にして下さい」若い刑事は顔をいかにもすまなさそうに弛ませて帰って行った。

凪子の顔が明るさを取戻し、微笑がゆっくりと浮かんでくる。何もかもうまく運んだのだ。あの男は密告していない。誰も計画殺人のあとで思い悩んだりはしない。江口秀人は当然の報いを受けたの

だ。刑事は帰って行った。
　凪子に突然、歓喜がくる。自分ひとりで……、あの男の助けは借りたかもしれないけれど、ほぼ一人で復讐したのだ。そのことが嬉しい。恨みを江口秀人に思い切り叩きつけるつもりが、口を噛み締めていた為に、何ひとつ言わずに……、でも、今更、恨みを言ってみても始まらないのだ。
　凪子は竜介の写真をとると、身内に太陽を抱くように抱き締めていた。竜介が死んでから始めて笑った。もう泣き喚めいたり、しくしく泣いたりはしない。

　男が江口家に着いたときには、午後二時を過ぎていた。まだ遺体は帰って来ておらず、広間には義母の血縁者と秀人の妻の縁者が頭を突き合わせて話込んでいた。
「何食わぬ顔で現れましたな」殆ど聞き取れないが、そういう声が聴こえる。
「秀人さんは医学博士でいらっしゃるのに、この方は三流大学の出で、金の力で卒業させておもらいになったとか……」
「国家試験も六回目にやっと……」

人声はもつれ合いながら勢いを得て、男をじわじわ締め殺しにかかる。
血まみれの秀人は僕の腕のなかで息絶えたのだ。それがわかる筈もないのに、どうしてこうも敵意に満ちているのだろう。僕ではない。いや、間接的には僕かも知れないが、違うんだ！　男が舌で転がしている言葉は喉の奥から這い出したうめき声に消されてしまう。
「ぼっちゃん、ちょっと」昔から家事を手伝ってきた女が、それとなく寄って来て、廊下の隅に男を誘い出した。
「すぐ、お帰りになる方がよろしいですよ。お母様があなただと決めてかかっていらっしゃるのよ」それでは悪口も解禁されたようなものだ。
「誤解だよ。何時ものことだが……。あの人どこ？　」
「奥ですけど、半狂乱ですよ。いらしてはいけません。今日のところはまず、お帰りなさい。明日、お通夜です。明日になれば、ことの真相も明らかになって、皆腹立ちをぶっつける相手がわかってくると思いますわ」
「何かわかってるの？」
「わかりませんよ、ただ、秀人さん、ちょっとおめかししてお出かけになりました。坊ちゃんに逢うのにおめかしする筈がありませんもの」女の肩越しに振り返ると、怒りに蒼ざめた義母の顔が見えた。

人間は怒ると憎悪の毒ガスを出すと聞いたことがある。義母は怒りの毒ガスで大きく膨れ上がっていた。誰かが注進に及んだのだ。

「あなたでなくて、誰が秀人を殺すのよ？　」

義母の手が震えている。怖がっているのはそっちなんだ。そうか、こっちは人殺しなのか。男にとって義母が動転しているのを見るのは、胸のすく思いだ。義母の息遣いが意味を持って途絶える。義母は周囲を見回し、人々の目の中央に自分をどっかりと置く。

「秀人には他人に殺される理由なんて、これっぽっちもございませんのよ。あなたに殺されたか、あなたと間違えて殺されでもしなければ、何ひとつ恨みを買うことなんてなかった筈です！　」

義母の目のつけどころの鋭さに男は圧倒されそうになる。

「あなたは秀人を嫉妬していた。あなたはご自分が愚かで病院を継げなかったことを恨んでいたのよ。私は自分の生んだ子供でもないあなたの為に、何時も頭を下げて歩かなければならなかった。謝り屋ですよ。あなたは私に誇りがないとでも思っていらしたの？　小学校の五年のときから、それも尋常な失敗ではなく、気が狂ってでもいなければとても考えられないようなことばかりでしたわ。医師になっても連続ですものね。何時かはインフルエンザの注射と間違えて、ツベルクリン液を２ＣＣも皮下にぶっこんでしまったことがあった。皮内針だから細くて短くて二段になっていた。いくらお喋り

しながら注射していたとしても、手ごたえが全く違う。普通のひとならそこで気づく、だけどあなたはそれを抉るように上腕に食い込ませた。針が細いから液を入れようとしたら圧力違う。少し可笑しい人でも、そこで手許を見る。ところがあなたはそれを見なかった。全部の液を注入し、引き抜き、トレイに戻してもまだその間違いに気づかなかった。気が狂ってでもいなければ、そういって侮辱されたわたしの身になってみたことが一度でもあったの？　その挙句の果てに、アッペの手術をして腸が溢れ出し、どうしても納まらなくなって、お手あげ。それでも、兄だから、ここの病院長になれると思っていたんですか？　ここまで我が子同然に育ててきたのに何の不足があったというのよ」

その瞬間、男は自分自身が流れ出していくのがわかった。

「我が子同然ですって？　育ててきた、それは可笑しいんじゃありませんか。僕はあなたの来た中学の時から、自立していたんだ。あなたから小遣いというものを貰ったことがない。だから中学の時から新聞配達などアルバイトをしなければならなかった。よい家庭の子供は自立を早くから教え込まなければなりません。それがあなたの口癖だった。ところが弟にはふんだんに金を与え、欲しいものは全部買い与えた。弟の部屋には僕の欲しいと思うものが、総てそろっていた。大学時代の十二年間、僕はお昼をカルケットとお茶ですました。今でも大學では語り草になっていますよ。総ては、あなた流にいうなら、自分の腹を痛めた子供である弟を、この病院の跡目に据えたいとあなたが望んだから

だ。結局のところこの家にとって、僕は恥でしかなかった。だから僕は、食べるものもなく、勉強する時間もなく、何時もおどおどし、失敗ばかり重ねてきた。といって、復讐など考えたこともない。父が亡くなったときでさえ、黙ってこの病院を渡した。勿論僕の権利の四分の一の財産は貰った。それは名目で、この家の実質的な全財産にくらべたら微々たるものだ。それでも僕は闘う気はなかったんだ。にもかかわらず、いまさら、どうして弟を殺すんだよ。僕が殺るなら、もっと早くやっていたさ。それに、殺るのは、弟ではなく、あなただ！　」

「やはりね、わたしを苦しめる目的で、秀人を殺したのはこの子よ。刑事さんに言って、刑務所にぶち込んでやる！　」

断末魔、これで江口家も終わりだ。五代続いた医者の家ももはや世間にとりつくろうものは何ひとつなくなった。言いたいことを言ってしまったのだ。男は自分の家を振り捨てるように、我家を出た。江口病院に回ると、外来は閉じていたが、病院は院長が殺されても動いていた。これからは他人の手で動いていくことになるだろう。病院の中を歩いてみた、父が生きていた頃のまま、何処も変ってはいない。父は僕の存在をどう考えていたのか。そこのところがわからない。自慢できる息子ではなかったのだから、隠しておきたかったのが本音だろう。視線を窓の外に移すと、監察医務院から送られてきた秀人の遺体が、白衣の男たちに担がれていた。

そのとき、後ろから背を叩かれた。
「あなた、病院長におなりになるの？」
振り向くと、お嬢さんこと、柏木早苗が立っている。
「あれええ、ここに、何時から勤めているんです？」
「はずれ！　入院しているのよ」神経科にいるのか、そういえばお嬢さんはピンクのガウン姿で、今にも散りそうな大輪の花だ。どうして、ここに？　先輩の長野亮太は見舞いに来ているのだろうか？隔日に会っているのに彼は何故黙っていたのだろう？
「なにか、力になれればいいんだが、いまは無力で……」男はすまなさそうに言うと外を指差した。次々に盛花が運びこまれていく。外に出ると、ガレージに急いだ。誰にも会いたくはない。
「だまされては駄目よ！　わかった！」早苗が跳び上がりながら二階から手を振っているのが見える。泣かせないでよ、これでも堪えているんだから……。

赤味がかったしみが浮き出してくる。江口秀人の血だ。防禦ひとつ出来ずに、死んでしまった口惜

しさをこめて、赤黒く濃さをましていく。この楕円形のアクセント、ラグをなんとかしなければ……。洗剤で拭いたくらいでは、しみを大きく広げてしまっただけ。根本的に処理方法を変えなければならない。鋏で砕片にして焼却する。どこで？

あの時のピアノの残響が耳の底にきて、切り刻んでいるカーペットの砕片が舞い上がる。

玄関のチャイムが鳴る。凪子は這い回わり、砕片を寄せ集め、その上にクッションを載せた。錠がカチカチ動き、ドアが開き、風圧で家中が震え上がる。

「一体、どうしたんです」弘子は警戒するように部屋のなかを見回している。

「いくら電話しても出ない。ドアを叩いても開けない、あなた此処にいたのに変じゃありませんか。管理人さんに鍵を借りようと思ったら、お留守、漸く帰られるのを待って、鍵をお借りして来たんですよ」弘子は口をつぐんで、尾翼を広げる。

「それにしても、変な臭い」凪子は慌てて窓を開け放つ。

「江口病院の息子、あの先生が病院長になっていて、殺されたこと、あなた御存知でしょう！　いい気味だわね、神様がいらしたのかしら。そしたら、急にあなたのことが気になって、出てきたんですけど、凪子さん、なんだかご迷惑そうね。どうしたんです。凪子さん、まさか、あなた……」弘子は怪しんでいるのだ。それが心配で出かけてきたのに違いない。図星なんです。実はわたしが殺してし

まいました。そう言いたいのを必死にこらえる。
「あら、絨毯を切り刻んで……まさかと思って来て見ましたけど、やはり、そうなの？　そういうことだったの？　……やはり、あなたをわたしの手許におくべきだったわ。やっぱり、そうだったの？」
弘子は床に座り込んだ。上体を丸めて急に老い込んでしまう。
「凪子さん……ここでなの？　……一人で？」
「……」
「変な……」いいかけて弘子は震える手で口を蔽った。
「色仕掛けで殺したんじゃないかって、おっしゃったんですか？」凪子がとがめる。
「いいえ、いいのよ。可哀想にひとりで……竜介のために？」
弘子は長い間、ベッドに目を注いでから、つと、眼をそらした。そらした顔が壁に張り付く。気がつかなかったが白い壁の上に針の先でつついたほどの小さな血しぶきが乾いて、無数にこびりついていた。ふたりは無言でその一つ一つを拭いていく。それがすむと、刻み残りのカーペットを二人で切り刻み、袋に入れて弘子は自宅まで持ち帰って焼却することにし、箱に入れ、宅急便で送るといって玄関に出した。
「他にはないの、今は庭でもなければ焼却も出来ないのだから……、あったら、わたしが持ち帰るか

ら……」
「それで、どうやって、運び出したんです？　」
弘子が刺激しないように言葉をえらんでいる。
「お医者が来て、手助けをしてくれたんです……」凪子は言ってしまい、改めてその不自然さに愕然とする。
「診察したけど手遅れだった、もう死んだあとだったんです」
「何ですって！　その医師は警察に通報しなかったんですか？　」弘子は畳み込んでくる。
「ああ、それなら、心配ないんです。友愛会の方で、わたしの悲しみがわかると言って……協力してくださったんです」
「なあに、それ、友愛会？　それ、なんなんです？　宗教団体？　まさか、犯罪組織じゃないんでしょうね！　」
「不幸に見舞われた若い女性の自立のために運用されているんです」
「変じゃないの、あなたは殺すと言っていて、江口病院長のために医者を呼んだの？　殺しながら、助けたくなったってわけ？　」
「いいえ、そんな、動転していましたから、わたしは電話しないと思ったけど……、でも、友愛会の

方だから、たまたま……」

「真夜中に訪問してくれるの？　変じゃないの。以前からそういうことがあったとでもおっしゃるの？　そう、あなたは娼婦まがいのことをして、ここに住んでいた。１ＬＤＫといっても他のマンションの２ＤＫはありますもの……。目的のためには手段を選ばずということなんですか？　目的が立派で、結果として復讐を遂げたとしても、そんなやり方では、竜介が喜ぶかしら？　嫌です。汚らわしい。何故、わたしに協力を求めないで、そんな医者の協力をもとめたんですか。凪子さん、あなたって方は……」凪子は驚いて弘子の誤解を解こうとしたが、弘子は耳を貸さず、横を向き、心を閉じ、頭をがっくりと垂れている。

「わたしだって、とても不思議なんです。不思議だからお母様が友愛会にわたしを推選して下さったのかとばかり思っていました。だって、横浜から、手紙は回送されてきましたから。いかがわしいことなど一度だってありません。そのお医者がいらしたのだって、その時がはじめてです。信じて下さい」

暫らくして、弘子は変身したみたいに、頭をきっと上げると、素早く腰を浮かした。

「隣のビルにあるんですか？　富士クリニックと言うんですね。そこの先生に間違いありませんね。では、確めてきます。お薬をいただきにいくという名目でよろしいでしょうね」

引き止めるのも間に合わなかった。気づいた時には、凪子はまた独り部屋にとり残されていた。でも、独りじゃない。わたしは竜介に話かける。

力つきました。どうなるにしても、もう、足も、手も、指一本も動きません。だけど、途方もなく自由なんです。

中年の女が眼を熱病のように充血させ、受付の前を素通りして診察室まで入り込んでしまい看護師を慌てさせる。

「江口病院の院長先生が死体で発見されたニュースお聴きになったでしょう。あれがうちの先生のご兄弟なんですよ。ですから、今日は午後から休診なんです」

江口家から帰り、女の来るのを待ちかねていた男は、診察室を覗いて危ういところで踏み止まる。中年女の顔は憎しみに引きつっている。あの手術の後、医局に押しかけてきた曽我弘子の顔がそこにあった。男は竜介の母親に対して無防備だった自分に気づいて動転する。あの女のことしか男の頭にはなかったのだ。

しかし、どのように恨みの視線に射抜かれようとも、男には自分があの女に最も必要な人物なのだという確信がある。女を保護しているのだという自負。秘密の共有。死体遺棄の証拠隠滅、偽証……。女のために罪を犯しても悔いはなかった。それに、いま急に彼女に同情したというものではなく、友愛会の名で送った金の受領証と、凪子のマンションの契約書がある。彼は落ち着きを取戻した。

男は看護師を手招きする。

「往診した患者のお母様だ。ちょっと問題があるらしい。相談があるのだろう。今日はこれでもう仕事は終わりです。きみ、帰る前に曽我凪子のお薬を受付に出しておいてくれないか。処方はカルテに書いてある」時枝は何もかも心得ているように動く。彼が入っていくと弘子は立ち上がって情容赦なく彼の顔を見つめる。

「曽我凪子さんの……よく似たところが、おありだから……」

「どうして、凪子さんとわたしが似るんです、血も繋がっていないのに！　おべんちゃらは言わないで下さい。先生は医療ミスで、竜介の足が二本切断されたことを御存知なんですね。今始めて聞いてびっくりした、なんておっしゃらないでしょうね」

「……」

「こちらは、たったいま、聞いたんですが、江口病院長とご兄弟だそうですね。お兄さまが殺された

というのにどうして、あの子を警察に突き出そうとなさらないんです？　変ですわ」
弘子は、自分の言葉にびっくりしたように声を低める。
「竜介にご同情下さるというのは、本当なんですか？　凪子と先生の関係はどうなんですか？　亡くなった夫の親が文句をつける筋合いはないとは思いますが……。もしかしたら、先生は凪子を利用してお兄さんを殺させたのではありませんか。本当に凪子が殺したんでしょうか？　先生がお兄さまの診察をするふりをして、とどめを刺したんでは？　先生が凪子に殺しを押し被せたんじゃないかと……？　」
「そう思いたいお気持ちはわかりますが、女性の力を甘く見てはいけませんね。凪子さんはお一人で計画的に復讐をやり遂げられた。それを喜んであげられるのはお母さまだけではありませんか。兄弟であっても死んで二度と生き返らないとなれば、僕としても、仕方ない。あえて喜びの方に勝ちを譲ろうと思うんですよ」
「そこが、不思議なんです。先生はお兄さまとよほど仲がお悪かったんですか？　」
「法律が許さない罪でも、天が許すべき罪というのがあると僕は思うんです」
「解せないのは、友愛会の方だと、何故凪子の部屋で起きたことがわかるのでしょう？　」
「嫌、たまたま、屋上で息抜きをしていたところ、窓に撲殺するシルエットがうつったんですよ。僕

は職業柄驚いて駆けつけました。凪子さんとお話したのも、その時が始めて……始めてみたいなものです」
「みたい？　以前、なにか？　」
「……」男は答えにつまる。弘子の疑い深い目が飛び出している。
「間違っても、凪子を裏切り、殺人犯に仕立てたりなさったら、わたしがただじゃおきませんよ。そうなったらマスコミに売ります。それでは、亡くなった江口先生の名誉も、江口病院の将来もだいなし、死者を鞭打つことになりますよ。左右間違えて切断したなどという医療ミスが公表されたら……」
男は医療ミスを弟に被せる後ろめたさで声も出ない。
「先生！　お薬を出しておきました。それでは、お先に」
看護師の声がドアの外で聞こえた。聞かれたのか？　男は凍りついたが、廊下に沿って靴音は遠くなった。
「お願いします。これ以上わたし達にむごいことはなさらないで下さい。二度も泣きをみせないで下さい」何処で何が変ったのか、弘子は弱々しい泣き声に豹変している。
「だから、彼女には約束していますよ」
「保証出来ますか？　」

「今、警察からも、遺族からも、犯人だと狙われているのは僕なんですよ。まだ信じられないんですか。僕は最近になって彼女に同情したというんじゃないんです」

男はいいながら、弘子に向かって書類を押しやる。何処までも秘密にしたかったが、止むをえない。弘子は不思議なものを見るように、凪子のサインのある受領証を見つめている。

「何の為に……」弘子はぼやけた目をあげた。

「罪滅ぼしですよ」言ってしまってから、男は慌てて小さな声でつけ加える。

「兄に代わって……」

弘子は深々と頭を垂れ、長い間じいっと下を見詰めていたが、顔もあげずに帰って行った。

一体、何を見ていたんだ！

男は息苦しくなってマスクをとり、眼鏡をとって息を大きく吸い込む。どうしようもない不安につき動かされて、急いで九階の小窓にとりく。

凪子はひとり、机に向かって坐っていた。頬杖をつき、うつむいている姿勢から見て、気持ちが弱々しくなっているのが遠目にもはっきり見てとれる。凪子が立ち上がり、その背後から竜介の母親が現れる。母親は用心深く灯を消して、電気スタンドに切り替えた。しばらく体を乗り出し、屋上からこの小窓のあたりを警戒してから、首を引っ込めて、更に電気スタンドを消し、用心深くカーテンを引

いた。
真綿みたいな白い月が三つ、西から昇って今、男の脳天にかかっている。彼女を見ようとして乱視になったのかもしれない。
「畜生！」男の手を放れた双眼鏡がふっ飛んで、空中で一回転してから落ちていった。

部屋の灯が消えると、闇の中で弘子の目だけが異様に明滅し、幾つもの凛音がその喉を昇っていった。
「凪子さん、あなたがどんなに誤魔化されたとしても、わたしは……わたしの目の黒いうちは絶対に誤魔化されはしないわ」
不吉を察知した凪子の心臓が喉もとまで飛び上がる。
「凪子さん、あれは、あの男よ！　竜介の肢を間違って切った、あの男に違いないわ」
「あの男って、誰？」
「富士クリニックにいるのは江口優馬。二人は兄弟ですよ」

「まさか、そんな！」凪子は闇の中で空を叩く。
「看護師が言ったのだから間違いありません。あなたは、江口病院の跡取り息子の責任よと、勢田看護師に囁かれて、父親が亡くなった跡を継いで病院長になったのは、問題の江口先生だと信じきってしまったけれど、彼には兄弟がいた。わたしも先入観をもっていたから、兄弟と聞いて、とっさに彼を弟だと思ってしまって、そう口に出してもいいましたよ。あの男はこれ幸いと、それを隠れ蓑にして兄の医療ミスを償うために、あなたに友愛会の自立資金を送っていたなどといったんです」
「違うわ！　あれは女性解放運動の……」
「いいえ、あなたのサインのある受領証を持っていました。この部屋もあの男が借りたもので、つまり、友愛会など、何処にも存在しなかったのよ。あの男も、あまりにも初歩的な医療ミスの、惹き起こした度重なる不幸に、少しは良心を持っていたあかしに、償いをしたいと思ったのね」
「でも、それはやっぱり、弟さんなのではありませんか。あんな髭やもみあげはなかったし、眼鏡もかけていなかったわ」
「いいえ、あの男は、わたしが誰かを知っていました。わたしの顔を見たことがあると言うことです。曽我凪子さんのお母さんだと、はじめから言いましたもの。そのくせ、自分は眼鏡をかけ、大きなマスクをかけて、顔を隠し見破られるのを避けていましたわ」

「でも、そう疑ってしまえば、そんな風に見えてしまうのではありませんか？　」
「あの髭やもみあげを毟り取ったら、どうですか？　あなたが間違えたのは兄弟似ているからでしょう！　」
「わたしが人間違いをして、殺人を犯してしまった。全然関係のない人を殺してしまったのだと、殺さなければならない男は、しゃあしゃあと生きているのだと、お母様は、そうおっしゃるのですか？　」
間違いだとしたら、本当に間違いだとしたら、ただの殺人事件でしかない。穢らしく、残酷で、崇高さひとつない恥辱。表現しようのない戦慄がくる。
「そうですよ、あなたは江口先生の顔など、マスクを掛けている顔を二三度見ただけしょう。あの男は、あの後、責任をとらされて、すぐに辞めさせられてしまったのよ。でもわたしは手術の直後、説明を求めて、何度医局にいったかしれない。あのおどおどした目は、江口先生の目です！　」
弘子は大きく息をついだ。
「その上、決定的なのは、あの靴！　あなたも覚えているでしょう。あの先生は体に合っていない、馬鹿でかい大きな黒い靴を穿いていらっしゃった」
「あの靴を穿いていたんですか？　」
「そうよ。この目でしっかり見てきました。間違いありません！　あんな、靴を穿いているのは、世

界広しといえども、あの男しかいない！」
「するとあの男は友愛会の名で、わたしに近づき自分の監視下に住まわせ、多分どこかから見ていた。そうなんですか？　でも、何故？」
「あなたに岡惚れしているか、近くに引き寄せて殺すつもりだったか。どっちかですね。思い出してごらんなさい。あなたは自分から電話をかけて先生を呼んだわけではなかった」
「ええ、あのクリニックの電話番号など、今も知らない！」
「偶然なんかじゃなかった。あの男はこの部屋のスペアキイを持っていたのよ」
「そういえば、江口秀人を見て凝然として後退りをしたわ。まるで、知っている人をそこに見出したみたいに……、悲しそうだった」
「新聞はどこですか？　夕刊を見てごらんなさい。何かがわかってくるかもしれませんよ」
弘子が落ち着きを取戻して言った。

怨恨か、通り魔か？
江口病院長撲殺死体にて発見！
東京都渋谷区にある江口病院院長、江口秀人氏三十五歳は、今朝午前四時頃、大町工業団地駐車場

の車の中で撲殺死体にて発見された。江口氏は有能な医師で患者や職員の人望も厚く、女性関係等の悪い噂もなく、感謝されこそすれ、恨みを持たれたりするどんな理由も思い当たらない、と関係者はいっている……。

「やはり、違うわ！　」有能な医師が左右を間違えて切断する筈がない。

……しかし、内偵の結果、鎮痛剤の横流しを暴力団に強要されていた疑いもあり、病院の相続問題で兄との間にトラブルがあったのではないか等と囁かれている……。

「何もかも、これで辻褄が合ってきますね。でもあの男は自分の方が疑われているのに、どうして警察に本当のことを言わないのかしら？　」

「そこが、もう一つわかりませんね」凪子が胸を締め上げると、竜介のラブレターがかさこそと乾いた音をたてた。

「わたしはあなたが可哀想でならないのよ。こんなにまでして復讐しなくても……。殺したからといって、竜介があなたを憎んでいないと……」

「彼がわたしを憎んでいる？　」

「いいえ、これは言葉のあやですよ。でももう殺してはいけない！」

総てが徒労に終わったのだ。殺しても殺してもこうなっては、悪運強く敵は生きているのだ。なん

てひどい間違いをしてしまったのだろう。もはや、取り返しのつけようもない。でも！

「殺してやる！」突然、言葉が凪子の喉許を押し上げる。

「殺しては駄目！　これ以上いけませんよ！　そんなことをしたからって、竜介は戻っては来ない！」弘子が叫んだ。

凪子はそのまま動かなくなった。弘子まで凪子を持て余している。

江口病院長殺害事件は暴力団と詩の同好会の絡む、鎮痛剤の横流しと判断した捜査本部の懸命の捜査は空振りに終わり、もう一度振り出しに戻り、遺産相続のトラブルに再び焦点を合せてきた。警察の連日の事情聴取に、男はすっかり生気を失っている。

死亡推定時間、十一時三十分から零時。往診は十一時から零時。死体が発見された時間が午前四時頃。警察は江口優馬のアリバイ崩しに躍起になっているように見える。殺害してから往診し、そのあとで死体を遺棄した可能性があるとして、警察が執拗に繰返す自白の強要に、降伏したい気分も、凪子にたいする愛の証として克服していた。しかし、女が殺したのはこの僕なのだ。あの女は殺すほど

僕を憎悪していた。そのショックは、生きる望みを否定してしまう。
あの女を一目見たときから、僕には女が自分にとって唯一の女性であることがわかっていた。だからこれまでも自分のミスに対して出来る限りの償いをしようと務めてきた。それなのに、その間、女は僕を殺すべく殺人計画を練っていたのだ。
あの女の僕に対する憎しみは解消できる見込みはないのかもしれない。本物の僕をあの女に殺させない限り、遅かれ早かれ、いや、もうあの女も人違いに気づいただろう。男が思い廻らしていると、
「あのアリバイはもう一度洗い直してみる。崩れるさ！　」帰りがけに若い刑事がうそぶいてみせた。
夜中の一時、男は臆病そうに電話のダイヤルを叩いた。もう時間がない。女の声が警戒するように小さい。
「僕です。わかりますか。夜が明けると、また警察にいかなければなりません。いいですか。急いで、安全なところに移って下さい」
「と、いうことは……約束を破って、秘密を警察に渡すということ？　竜介を殺したのはあなたなのに、またも、わたしを殺すと言うこの？　」
「いいえ、違う、違います。そんなことはしない。僕はあなたのためなら何でもしたい。本当です、ですから安心して、行き先は私書箱に。わかりましたね」

「必ずわたしに逢いに来ると約束して下さるなら……あなたの本当のお気持ちを確めたいのです」
「僕も、お逢いしたい……」男の声が上ずる。
「ほんとね、必ず来ると約束して！　」
彼女に心が通じたのだ、女が泣いている。受話器を耳に押し当てると、電話が切れていた。竜介の母親が切ったにきまっている。息子の嫁が別の男と親しくなっていくのは気分が悪いに違いない。
とうとう、愛を確めあった。もともと愛は憎しみに似ている。憎しみの強さが愛の強さに様変わりする。男は窓を見やったが、双眼鏡はもうないし、向こうは闇だ。体中の力が抜け、頭がくるくる回転していた。あの女の人生は僕のものになる。男は空を抱きしめ、その優しい唇に長い長い官能的なキスをした。漸く、僕のものになる。
男はハンカチを取り出すと、玄関に陣取り、うっとりと靴を磨いた。

一睡もしないで夜をあかした男が、またも警察の呼び出しに応じて出掛けようとすると、
「グループの先生方が、昨日集まられて、皆さん心配していらっしゃいました。先生のお帰りをお待ちになっていたんですけど、それぞれ、手の離せない患者をお持ちで、やむなくお帰りになりました。それで、血迷うな！　そういってくれと。ああ、それから、長野先生は、お嬢さんが淋みしがってい

るから、時に見舞ってあげて欲しいと……」時枝が少しつかえるような口調で言うと、眼を斜視にして男を見る。
「なんだか、贈り物があるとかで、預かってあります。寒くなるから、着て欲しいと……」
「そう」血迷うなとは、あの女を警戒しろと言うのかもしれないな。あいつらは読心術を心得ているから、往診先が女だったと時枝から聞いただけで察したのかもしれない。全くの不適格者が就労しているのは、医師と教師が最も多いというが。このグループもそうだ、皆欠点を持っている。だが、富士グループとして開業することで医師として最も幸福な充実期にいるのだ。相続した遺産も少しは役立っていた。よき友を得て共同経営も走り始めたところだ。医師でなければもっともっと、幸福だったのかもしれない。しかし、その幸福も怪しくなっている。
取り調べ室に入ると滝川警部が、男の目の前に、レンズの割れた双眼鏡を突きつけてくる。
「この双眼鏡に見覚えはありませんか。これにはばっちり指紋がついている」
男は全身が硬直し、恐怖だけがはっきりしてくる。これでは彼女との関係が本当に洗い直される。
「きみはこれで何を見ていたのかね？　」
「……」
「どうしたんだ、覗きでもやっていたのか？　」

「まさか、僕は覗きなどしたこともありません。　ある人物のことを考えて腹をたてて投げたんです」
「相手は弟だな。漸く自白する気になったか！　凶器はなんだ？　」
「それは……」
「誰かを庇っているのか？　女でも？　」
「違います」
「否定するところが臭いな。女を使って弟をおびき寄せたか？　」
「違います。僕一人ですよ。僕は自分に腹が立った。誰でも自分に腹が立つものでしょう」
男は自分の言っていることがわからなくなってきそうだ。
「バッドで後頭部を何回打ったのかね？　」
眩暈がする。その時、部屋に入ってきた刑事が滝川警部になにか耳打ちした。警部は急ぎ足で部屋から出ていく。
曽我竜介が死に、後を追って五階から飛び降りようと必死だったあの女の、哀しいまでの美しさは正視できないほどだった。あの時、この人の身替わりになれるなら命も惜しくないと思った。それなのに弟が僕の身替わりになった。僕はあの女に殺されて当然な人間なのだ。今更命乞いはしない。弟を間接的に殺したのも僕自身なのだから。

男は観念すると気が楽になった。あの女を救う！　そのことで心を充たすことが出来る。
男が決心を固めたとき、滝川警部が席に戻ってきた。
「やはり、何かを隠していましたね。自分に腹を立てた理由がわかりましたよ。きみはあの夜、十一時頃、静岡県の掛川市でひき逃げ事故を起していた。図星でしょう、相手は全治二ヵ月」
「……」男は下を見ている。意味がまるでわからなかったが、自分に有利なのかも知れない、とも思われたのだ。チャンスはやって来る。
「きみが否認しても、看護師が証言している。あの日、午後七時頃ガレージを出て、浜名湖までベンツでドライブしたとね……。それに翌日、芳田刑事が参考のために車を見た時、バンバーがひん曲がったままだった。被害者は幸いにも命をとりとめ、車種と色を記憶していたんだ」
「あの車は父の形見で大切にしているんですよ。それにガソリン消費量が多いから僕は乗らないようにしていたんです」
　そういえば、時枝が意味深な目つきをしていたが、やはりあの時盗み聴きをしていて、長野と組んで何かを企んだのかもしれない。
「今更、轢き逃げを隠してみてもはじまりませんよ。車の塗料が一致したし、証人もいるんです。これで、きみの江口病院長殺害事件の容疑は晴れたことになります。秀人氏が女と店をでたのは十時半

頃、殺害して、死体の処理を誰かに依頼したとしても、十一時までに掛川へは行けない。しっかりとしたアリバイが出来たものです。きみは曽我凪子の往診をしたと主張したが、看護師が言うには、あの日の担当は長野亮太で、長野先生が往診したのだそうじゃありませんか。長野先生もそれを認め、カルテも一目で彼の筆跡だと判明しました」

自分は犯していないのに、凪子の罪の替わりに、今度は先輩の罪を親切にも背負い込むのが有難いのかどうか？

長野先輩の欠点は車だ。あれほどの僕の理想像も車が絡むとややこしくなる。ベンツにしきりに乗りたがっていたから、無断で乗り事故を起したに違いない。免許を取り上げられていた筈だ、逃げるに逃げられぬところを、僕を助けるため、一石二鳥を狙ったのかもしれない。

「証言は看護師だけではありませんよ。往診先の曽我凪子は旅行中だそうですが、母親がいて、髭も眼鏡もかけていない医師が往診したと証言している。そういうわけで、あなたは逮捕されます」

竜介の母親まで何を考えていることか？　信じられない。死刑になるかもしれない罪状が、もし示談ですめば幸運には違いないが、時枝や長野たちが僕を弟殺しと思っているのか、それともあの女を庇っていると思っているのか、その辺が気がかりになる。

女は既に身を隠した。そのことがかえって疑惑を呼び寄せはしないか。男は早く私書箱に駆けつけ

たかった。人身事故のけりがつけば、再びあの女に逢える、傍で護ってやることができる、男は有頂天になっていった。

偽りのアリバイを証言した曽我凪子の身元調査を進めていた捜査本部は、凪子の夫竜介が骨肉腫で東西病院に入院して死亡した際、江口優馬が担当医だったことを掴み、関係者の事情聴取に入った。

江口病院長の兄、引き逃げで逮捕

先に大町工業団地駐車場で他殺死体で発見された、江口秀人病院長の兄優馬三十八歳は、秀人氏が殺害された夜、午後十一時ころ、静岡県掛川市の国道を自転車で横断中の会社員、津田巳代治さん五十五歳を刎ね、全治二ヵ月の障害を負わせ逃走していた事実が判明し、逮捕された……。

新聞の社会面に小さく載っている記事を、凪子は雪の降る赤倉の民宿で長い間見つめていた。はじめ読んだ時は助かったと思った。

容疑は別の方に向っている……。二回目に読んだ時はどきんとし、以後、読み返すたびに混乱して

くる。
あの男はどうやってこんな罪を背負い込んだのだろう。死体遺棄幇助の罪より轢き逃げの罪が軽いとでもいうのだろうか。
それによって、凪子への往診が否定される。警察は凪子に疑いを持つ……。
しかし、その後何日か経過しても、曽我凪子が指名手配されたとのニュースはない。
あの男はわたしに何を欲しているのだろう？　わたしに何故拘る、肉体だけを欲しているのなら、殺人を目撃したことを種に、どんな脅迫もできたに違いないが、彼はそうしなかった。それだけではない、友愛会などというものを作って自分の罪を償おうとした。異常というにはまとも、まともというにも潔癖すぎる。自分の気持ちを押しつける気はないのだ。わたしも彼を愛さない以上、指一本触れないだろう。彼の熱に浮かされたような目が、わたしを丸ごと欲しいと告白している。これを利用すれば彼を殺すことが出来るのかも知れない。
男には所詮、自分自身の軽率さは後悔しても、わたしが竜介を失った悲しみを理解出来る筈はない。医師は死とつき合って成り立つ商売、一人死ぬ度に死ぬほど悲しんでいたら職業としては成り立たないと秀人は言った。男に対するわたしの心情はどうなっているのだ。彼を許しているのか？　許してもなお殺そうというのか？

あれから、この影絵の世界で何日待ったのだろう。明日から待つのを止めようと思ったとき、タクシーが止まり、男の細長い体が白い雪の上に長い影を引きずって近づいてくるのが見えた。
すり足で、細く、長く、音もたてず、ゆっくりと、時々足をもつれさせ、男の回りで粉雪が舞い上がる。
……あなたは決してわたしを裏切らない人、わたしを一人にしておかないで下さい。早く来て下さい。怖いんです。気が狂いそうです。愛しています……。
これはわたしの胸のポケットに縫い付けてある、竜介の最後のラブレターだ。私書箱宛に送った最後のラブレターが、確実に彼を此処まで導いたのだ。
男は足を止め、羞恥の混じった弱々しい微笑を浮かべる。凪子に向かって差し出した腕が宙に迷って逡巡する。
「毎日待っていました！」凪子のかすかな声は聞きとれない。
「新聞を見たでしょう。僕はあれがなければ、弟殺しを自白しようとしていたところだった、というのに車の事故という、僕の関知しないアリバイが突然勝手に出来てしまって……」
男は悪いことでもしたようによれよれと身を細める。
「僕のグループと言うか、駄目医者仲間に、長野というのがいましてね、一日置きにクリニックを手

伝ってくれているんですが、ベンツに乗りたいと言って、僕が遺産相続するに当たって、父のベンツをとれといって煩かったんですよ。近頃、キイを貸しっぱなしにして忘れていたんですが、くしくもあの時間帯に事故を起したのはあいつなんです。長野は看護師と一緒に策を練って、僕を轢き逃げ犯にしたててしまった。これで彼らは、僕を弟殺しから、護りきったつもりで、小躍りしているんです。いい奴なんですよ。それで逮捕されたんですが、何故か示談ですんで、狐につままれた思いなんです」

男は頭を掻きながら、しなやかに生き返る。

「でも、それでは、わたしのアリバイ証言が嘘ということになるでしょう」

凪子は雪を蹴る。粉雪の粒子は視界を埋め、七色に分解する。

「わかって下さい。自分だけ罪を逃れよう等と思ったわけではありません。とんでもないやつらなんです。いや、しかし、そのために、こうして逢うことが出来たんですから、僕に思い残すことはない。帰ったら、自分が殺ったと、あなたの為に自白しましょう。僕は何処までもあなたを護るつもりです。弟が憎かった。おびき出したのは僕だ。そう、いいましょう。凶器を捨てた場所を知っている、本当のことなのだから。あなたも知らないのですから。警察も覆しようがないでしょう！ 」

凪子は手で男の髪の上に積った雪を払った。

「わたしもいろいろお聞きしたかったし……」

興奮し上気した凪子の頬に雪がきもちよかった。こんな時でも、相手が敵でも、愛されていると感じるのは嬉しい。そんなものなのか？　それでよいのか？　竜介が胸の中で考え込んでいる。

民宿では人に聞かれる怖れがある。二人は今年始めての雪をきしませながら、なだらかな雪の斜面をのぼっていった。道の両側は糸杉の林が雪を載せて続いている。時々眼の丸い子リスがくるみをねだって雪を振り落す。余りにも静かな道を二人は黙って歩いて行く。

「あの日、曽我竜介さんの骨肉腫の足が大腿部で切断され、まだ暖かい肢が第二助手をしていた僕の手に残りました。あの重さ！　僕にとっても引っくり返るほどの、気の遠くなるようなショックでした。患者を思って泣けました。切断部は縫合され、消毒がーぜに包まれて固定されました。僕にとっては東西病院に就職してはじめての手術だったんです。とにかく無事に終わってほっとしたとき、あっ、急に医長が絶句し、患者を今にも移送用のベッドに移そうとしていた看護師を押しのけ、白布を剥ぐと、一本になった下肢を医長の手が腿から膝と素早く探ってから、放心したようにがくっと落ちました。（誰だ！　左右をあんなに間違わないようにと頼んでおいたじゃないか！　）言われた若い看護師はとまどった目を僕の上に移して、（だって、江口先生が、消毒なさったんです）といったんだ（きさま！　）医長の足が僕を蹴飛ばし、（おまえ、いい年をして右も左もわからんのか！　）と怒鳴りました。まだ患部は残っているのですから、手術は続行されました。切断した肢を何とか繋げないかと

僕は必死で頼みましたが、失敗したらどうなる、そんなことをしたら、こっちの命取りだと怒鳴られました。とにかく余りにもひどい、理由などつけようもない重大ミスでした」

「あなたは執刀医ではなかったとおっしゃるの？　わたしは確めてあるのよ。中山医長があの日、前の手術に時間がかかって、執刀医はその時点で江口先生に変更されたと……」

言い逃れ！　凪子の体は小刻みに震える。この時になっても弁解しか聞こえて来ない。

「それでも、右と左を間違えたのはあなただとは認めるんでしょう？　消毒してあれば誰だってその足を切るでしょう。人殺しをしておいて、あなたはその総てを他に原因があるようにおっしゃるのですか？」

「僕じゃない、僕じゃないんだ。肢はカバーから出ていた、本当です。勿論確めなかったのは僕が悪い、でも、わかって下さい。僕に切断など出来るわけがないんだから……。その証拠に、まだ執刀者になったこともないんですから」

「私たちは竜介にどう説明したらよいかと想い余るばかりで……。あの時、あなたは病状が思ったより進行していましたので、やむなく両足切断しました。そうおっしゃったんです。わたし達は、右から、左に転移することがあるのかとも思ったりして……」

凪子の涙が頬を伝い粉雪がそれを冷した。この男の説明には何かが欠けている。

「あれは、そう言うように、紙に書いたものを持たされたんです。右から左に転移することはまずないと聞いています。前の手術が難航し、一般状態が悪くなったので、次の執刀開始が二時間も遅くなって、医師が動員され、みんな焦っていたんです。もっとも重要なミスは担当医が手術の前に行うべき病理検査を省略し術後に回してしまったことです。勿論診断の段階で検査はしてはあった、しかし、今回の場合、それさえしていれば、二本も切るという事態は防ぐことができた。時間が遅れたことであせって、検査結果の待ち時間を嫌ったんです。それでもなお、いくつかの、チェックが、まともに、機能していたら、あんなことにはならなかった筈です。勿論、その責任は僕にもありますけど、切ったのは僕じゃないんだ！ 」

風がでたのか北風が凪子に声をかけながら過ぎて行った。騙されるな！

「僕はあなたの力になりたかった。でも、僕が総べての責任をとる形であの日に解雇され、自分を主張することも、謝罪することも許るされなかった。僕は友愛会の名をつかってあなたを援助することにしたんです。でも、あなたが殺したいほど僕を憎んでいた事実を目前にした時はショックだった。僕には殺人者の自覚がなかった」

「もっと早くお話を聞いていたら、或いはこんなことにならなかったかもしれない。しかし、わたしは復讐の時の為に、あなたに逢うことを避けてきたんです」

「そう、そうですか、新婚旅行から帰ったばかりだというあなたは、本当に眩しかった。僕の腕にあなたの噛み付いた跡がある」
「そんなこと、嘘よ、嘘で攪乱するなんて、フェアじゃないわ」凪子は妙な気分になる。
「後を追って、窓から飛び降りようとするあなたを僕は必死で後ろから抱きとめていた。あなたの力は強くて、もう何度も駄目かと思いました。力尽きた時、あなたと僕は病室の床に尻餅をついていた。あの日、僕はあなたのことが気になって、解雇された病院にのこのこ出かけていったんです。だから、あなたの命は僕のものなんだ！　」
　凪子は男にゆっくりと身を寄せていく。
「きみの顔が見たかった。そう、そんな風に優しく、触れてほしい。真っ白な雪の中、あなたがいて、あなたは僕だけを見つめている。毎日、僕を待っていてくれたんですね。あなたは、僕を許してくれた……」
　男が背に腕を回してくる。男の熱い唇が震えながら、凪子の唇を追いかける。二人は上体を次第次第に密着させ、雪の中に倒れ込んでいった。凪子が胸を探ると、足をばたつかせて笑い声をあげた。
「嘘つき！　」
　凪子は上体を持上げ、右手にぐいと力をこめ、全身の重みをかけていった。凪子はそろそろと立ち

上がった。男が大きく身を捩ると、雪に血の赤が滲んで拡がっていく。
男の胸からナイフを抜きとり右手に握らせる。ふと見ると、ポパイの靴が生きもののように飛びあがった。針葉樹がいっせいにざわざわと雪を振落とした。凪子はゆっくりと歩き始める。
雪煙のなか、遠くにパトカーの花冠が明滅し、男たちの黒い影が近づいていた。

弘子は、家宅捜索されているシティマンションの屋上で、ひとり隣のビルを見詰めいた。
「可哀想に、凪子は、竜介を殺したのは、自分だとも知らずに……」
覗く男のいなくなった、小さな窓から、今もさまざまな目が代わる代わる覗いているように、弘子には思えてならない。季節風は冷たかったが、此処以外のところに移動する気にはならなかった。
……病院は逃げの一手、何ひとつ説明らしい説明を受けないまま、竜介を殺した口惜しさをわたしは病院長にぶつけていったのに……。あんな恐ろしいことが事実なのかどうか？　病院側では竜介は自殺したのではなく、他殺で、凪子が殺したのだといったのだ。
いくら肢がないといっても、高さ一メートルのベッドの背に紐を結んで大人が首を吊るのは不可能

だ。竜介が死んだのは、凪子が慌てふためいて、体に縋りつき、自分の体重をかけて強く引き倒してしまい、それによって絞殺したのだと……。こちらが、医療ミスを公表する気なら、竜介を絞殺した罪で凪子を警察に突き出すといったのだ。弘子はどんなことがあっても、凪子にそのことだけは知らせたくなかった。ふたりは初恋を実らせて結婚したばかり、何としても、あの愛を汚したくはなかったのだ。そこで病院側の言うままに取引してしまった。双方不問にする交換条件で了解したのだ。

「凪子に本当のことを話した方が、今より結果がよかったのではなかったか……」

弘子のつぶやきを聞いている者は誰もいない。

男は厚い防寒用ベストに遮られて、刃先は急所をはずれ、一命をとりとめ、凪子は自殺寸前、長野亮太のグループによって保護され、警察に引渡された。

完

引用　ランボー「飢え」より　秋山晴夫訳